

Charles François Daubigny

シャルル=フランソワ・ドービニー(1817~1878)

作品名 夏の麦畑 (1850~1855年頃)



Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



世界の文化遺産



作品名 夏の麦畑 (1850~1855年頃)

種類 板に油彩

サイズ 17×33.5 cm

鑑定書 Francois DELESTRE 裏側に Karl DAUBIGNY の書付き

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった（このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた）。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール=シュル=オワーズに住んだ。1868年にはサロン（官展）の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダム・ゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた（九月～一月）ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

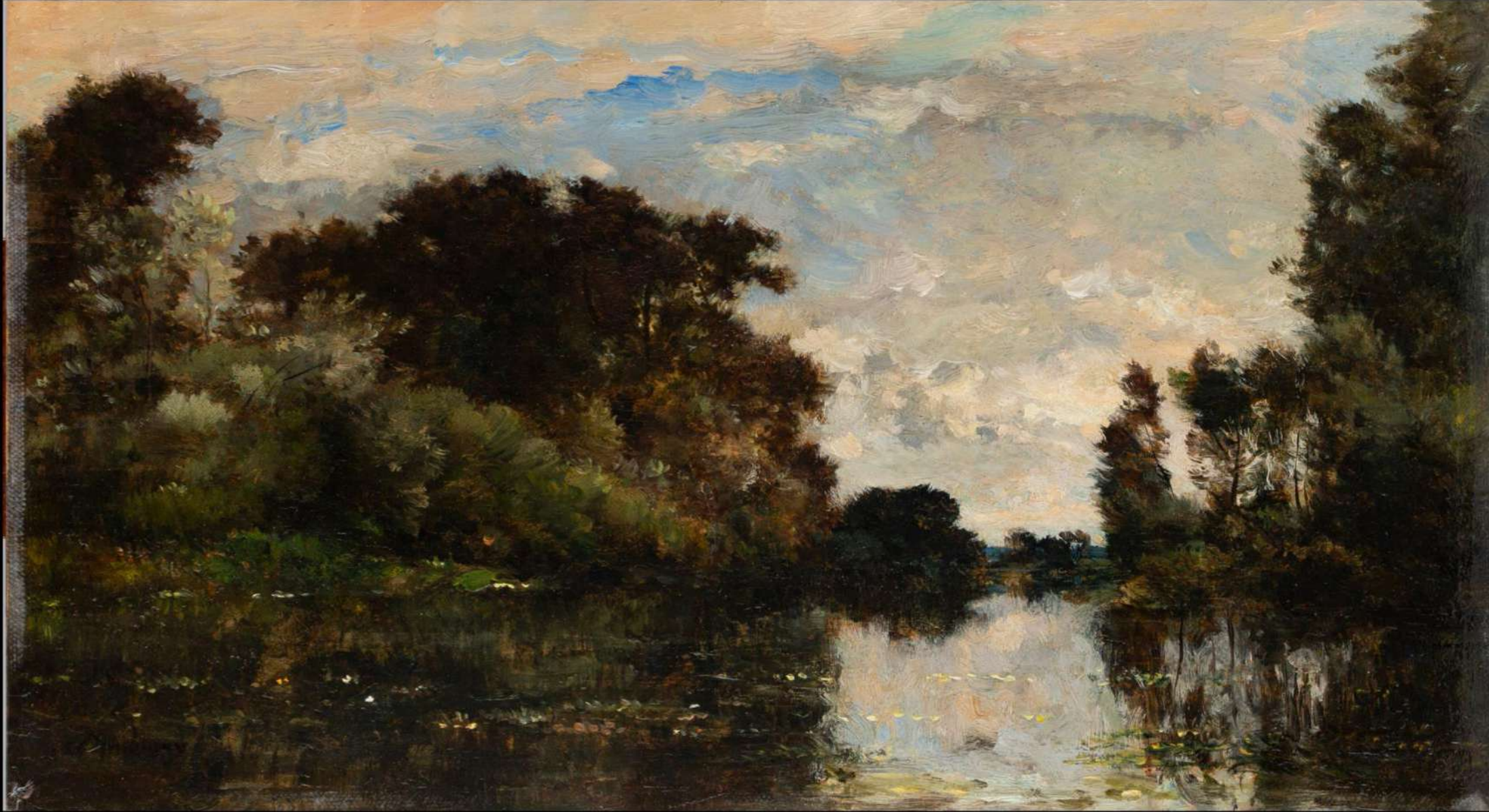
※ ゴッホはこのドービニーの《夏の麦畑》の作品の構図をそっくり真似てドービニーに対するオマージュとして《カラスのいる麦畑》を描いたのです。

ゴッホのカラスはドービニーの《カラスのいる木》のエッチングから取ったものです。

Charles François Daubigny

シャルル=フランソワ・ドービニー(1817~1878)

作品名 朝の河畔 世界の文化遺産



ドービニーは河を好み水面の反射、静かな流れ。夕暮れや曇天の空気感、これは後のモネの水辺表現の原型になります。

小舟を浮かべその場で風景を描くという革新的な制作方法を実践しました。

Charles François Daubigny

シャルル＝フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 朝の河畔 世界の文化遺産

種類 板に油彩

サイズ 24.0×43.8 cm 左下にサイン有り

鑑定書 Philippe Cezanne

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった（このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた）。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール＝シュル＝オワーズに住んだ。1868年にはサロン（官展）の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダムのごッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた（九月～一月）ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと暮っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 水飲み場

種類 エッチング(1889 年作)

サイズ 25.4×38.0 cm

"鑑査師 A.ブラーレ Auguste BOULARD Jr. (1852-1927) "

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。1834 年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857 年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860 年以降はパリ郊外のオーヴェール=シュール=オワーズに住んだ。1868 年にはサロン (官展) の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857 年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年 2016 年オランダ・アムステルダムゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた (九月~一月) ドービニーの 80 号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は 1867 年おやじさんと慕っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2 点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

展覧会歴:

秘蔵の名品アートコレクション展不滅の輝き 蘇る幻の松方コレクション。
ホテルオークラ東京。2003 年。No8.

来歴: 松方幸次郎。神戸・【松方コレクション】

藤本ビルブローカー銀行により差押え。大阪。1927 年
第 1 回松方氏蒐集欧洲美術展覧会。東京。1928 年 3 月 13 日-30 日。ロット 99
第 6 回松方氏蒐集欧洲絵画展覧会。大阪 1934 年 5 月 19 日-27 日。ロット 29
第 11 回松方氏蒐集欧洲絵画展覧会。大阪 1940 年 4 月 13 日-17 日。ロット 18
加賀正太郎。大阪

Shinko Shokai. 神戸 個人蔵 東京

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



世界の文化遺産

作品名 夏の麦畑 (1850~1855年頃)

種類 板に油彩

サイズ 17×33.5 cm

鑑定書 François DELESTRE 裏側に Karl DAUBIGNY の書付き

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった（このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた）。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール=シュル=オワーズに住んだ。1868年にはサロン（官展）の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダム・ゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた（九月～一月）ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れのある作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 農民のいる平原の風景

種類 板に油彩 1872年

サイズ 11.1×30.7cm サイン有り

鑑定書 Michel RODRIGUE

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった（このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた）。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール＝シュール＝オワーズに住んだ。

1868年にはサロン（官展）の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている。

今年2016年オランダ・アムステルダム・ゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた（九月～一月）ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコロートとも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 海

種類 板に添付したキャンパスに油彩

サイズ 15×26 cm

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール=シュール=オワーズに住んだ。1868年にはサロン(官展)の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている。

今年2016年オランダ・アムステルダムゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた(九月~一月)ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れのある作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

展覧会歴:

秘蔵の名品アートコレクション展不滅の輝き 蘇る幻の松方コレクション。
ホテルオークラ東京。2003年。No8.

来歴: 松方幸次郎。神戸・【松方コレクション】

藤本ビルブローカー銀行により差押え。大阪。1927年

第1回松方氏蒐集欧洲美術展覧会。東京。1928年3月13日-30日。ロット99

第6回松方氏蒐集欧洲絵画展覧会。大阪1934年5月19日-27日。ロット29

第11回松方氏蒐集欧洲絵画展覧会。大阪1940年4月13日-17日。ロット18

加賀正太郎。大阪

Shinko Shokai.神戸 個人蔵 東京

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 オワーズ川の空

種類 板に油彩

サイズ 40.5×67cm サイン有り

鑑定書 Vincent MARILLIER

お略 歴

生まれ。父 Edmond François Daubigny、
叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。
1834年にフパリオンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、
多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール=シュル=オワーズに住んだ。
1868年にはサロン(官展)の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。
バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダムのゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた(九月~一月)ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おじさんと慕っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 オーヴェル=シュル・オワーズを望む

種類 格子パネルに油彩

サイズ 31.8×50.5 cm

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、
叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。
1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、
多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェル=シュル・オワーズに住んだ。
1868年にはサロン(官展)の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。
バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダムのゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた(九月~一月)ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おじさんと慕っていたコロートも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 李花のある風景

種類 板に油彩

サイズ 15.2×25.9 cm 画面左下にサイン

文献：神戸市立博物館編、「松方コレクション西洋美術総目録」
〔松方コレクション展〕実行委員会刊、1990年) No. 511に掲載
川口雅子、陳岡めぐみ編著、「松方コレクション西洋美術全作品」第一巻
(国立西洋美術館刊、2018年) P155. No353に掲載

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、
叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。
1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、
多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェール=シュール=オワーズに住んだ。
1868年にはサロン(官展)の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。
バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダムゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた(九月~一月)ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコローとも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

展覧会歴：

秘蔵の名品アートコレクション展不滅の輝き 蘇る幻の松方コレクション。
ホテルオークラ東京。2003年。No8.

来歴：松方幸次郎。神戸・【松方コレクション】

藤本ビルブローカー銀行により差押え。大阪。1927年

第1回松方氏蒐集欧洲美術展覧会。東京。1928年3月13日-30日。ロット99

第6回松方氏蒐集欧洲絵画展覧会。大阪1934年5月19日-27日。ロット29

第11回松方氏蒐集欧洲絵画展覧会。大阪1940年4月13日-17日。ロット18

加賀正太郎。大阪

Shinko Shokai.神戸 個人蔵 東京

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 オワーズ河畔の風景

種類 キャンパスに油彩

サイズ 47.0×80.0cm

来歴: Sotheby's London, Wednesday, November 28, 1990

『Lot00249』 Nineteenth Century European Paintings,

Drawings & Watercolors

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。

1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった(このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェル＝シュル＝オワーズに住んだ。1868年にはサロン(官展)の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。

バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年2016年オランダ・アムステルダム・ゴッホ美術館にて、【ドービニー・モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた(九月~一月)ドービニーの80号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評価であった。この作品は1867年おやじさんと慕っていたコローとも関連あるマントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの作品がある。2点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



右、同日夕方に描いた同じ大きさの作品
二点に分けて昼の部分と光量が少なくなる
夕方に分けられて暗闇迫る光の効果を描いたものです

作品名 マント橋(1867 年作)

種類 板に油彩

サイズ 24×44.5cm

Robert Hellebranth 著ドービニー カタログレゾネに NO67 として掲載

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、
叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。

1834 年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、
多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857 年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、
オーワズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった (このアトリエ
舟での制作手法は後にモネに受け継がれた)。

1860 年以降はパリ郊外のオーヴェル＝シュル＝オーワズに住んだ。
1868 年にはサロン (官展) の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成
する事になる若い画家たちを積極的に評価した。

バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと
言われる。1857 年にレジオンドヌール勲章を授与されている

今年 2016 年オランダ・アムステルダムのごッホ美術館にて、【ドービニー・
モネ・ゴッホの風景の印象展】が開かれた (九月～一月) ドービニーの 80
号以上の大作が多く展示されドービニーとモネ、ゴッホは同格かそれ以上の評
価であった。この作品は 1867 年おやじさんと慕っていたコローとも関連ある
マントの橋で、もう一点同じ日の同じ構図のこの後の時間帯を描いた夕暮れの
作品がある。2 点の作品を通して光の移り変わりを見事に描いている作品であり
印象派のリーダーとしての魁の作品である。

印象派の先駆者・水の画家と呼ばれている

Charles François Daubigny

シャルル = フランソワ・ドービニー (1817~1878)



作品名 ウール河畔 ポン=ド=ラルシュ (1877年)

種類 板に油彩 ドービニーの最晩期の作品

サイズ 38×66cm

Robert Hellebranth 著ドービニー カタログレゾネにNO115として掲載

略 歴

パリ生まれ。父 Edmond François Daubigny、叔父 Pierre Daubigny も風景画家であり年少時より教育を受けた。

1834年にフォンテーヌブローの森などで作品を制作して以降、多くの土地を旅行してまわり、戸外での観察を重視して風景画を多く描いた。

1857年からは、自身の所有する小舟「ボタン号」をアトリエとして使用し、オワーズ川やセーヌ川に浮かべて舟の上から制作する事もあった（このアトリエ舟での制作手法は後にモネに受け継がれた）。

1860年以降はパリ郊外のオーヴェル=シュル=オワーズに住んだ。1868年にはサロン（官展）の審査委員を務め、モネなどの後に印象派を形成する事になる若い画家たちを積極的に評価した。

バルビゾン派の一人に数えられ、印象派につながる重要な先駆けを果たしたと言われる。1857年にレジオンドヌール勲章を授与されている

Charles François Daubigny

シャルル＝フランソワ・ドービニー(1817~1878)



作品名 日没(1859年)

種類 エッチング

サイズ 11.5×18.4cm Salmon(刷師)

略 歴

パリ生まれの風景画家で、バルビゾン派の巨匠である。自然をありのままに写す作品はブーダンら初期の印象派の態度に近い。ゴッホ最後の地となった南仏オーヴェール＝シュル＝オワーズの風光を発見したのも彼であり、銅版画にも優れたものがある。バルビゾン派 七星の一人



パリ生まれの風景画家でバルビゾン派の巨匠である。
自然をありのままに写す作品はブーダンら初期の印象派の態度に近い。

ゴッホ最後の地となった南仏オーヴェール＝シュル＝オーワーズの風光を発見したのも彼であり、銅版画にも優れたものがある。

シャルル＝フランソワ・ドービニー

1817－1878年

作品名 風景

サイズ 15号